様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２３３４

研究課題名（和文）語形成から迫る形容詞の意味と項構造

研究課題名（英文）Semantics and argument structure of adjectives: an approach from word formations

研究代表者
由本　陽子（Yumoto, Yoko）

大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・教授

研究者番号：９０１８３９８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,700,000円

研究成果の概要（和文）：日英語の形容詞が関わる語形成の項構造と意味特徴について、以下のような新しい知見が得られた。まず、動詞由来複合語に関わる項構造の制約が形容詞と項の複合にも有効であることから、日本語形容詞の主語は内項、形容名詞と英語形容詞の主語は外項であると考えられる。第二に、形容詞とその主語から成る日英語の複合語形成には、分離不可能な部分・属性という意味関係上の特徴によって形容詞の述語機能を保証する語形成の仕組みが働いている。さらに、この主体と部分・属性という関係性は、形容詞派生動詞における例外的な他動詞構文の再帰的項構造の条件でもあることから、意味構造と項構造の投射関係に広く適用される注目すべき要因といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
形態論において、形容詞が関わる語形成についての研究は非常に遅れており、特に複合については、動詞が関わるものには多くの研究があるが、形容詞を基体とするものは看過されてきた感がある。本研究では、まず補部をとる英語の形容詞についてそれらを主要部とする複合の生産性をコーパスを用いて調査し、複合形容詞・形容詞由来複合名詞いずれも動詞由来複合語と同じ条件が有効なことを実証した。いっぽうで、日本語で生産性がある形容詞と主語との複合の分析から、複合において、主要部の項構造ではなく、結合する名詞の性質による制約が関わることがあることを明らかにした。また日英語の動詞から形容詞を派生する接辞の相違点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：By examining word formation processes based on or deriving adjectives, this study revealed the following insights on the semantic characteristics and the argument structure of adjectives. The widely-accepted principle on the argument realization of deverbal compounds also holds for compound adjectives and deadjectival compound nouns, thus the subjects of Japanese adjectives are internal arguments while those of Japanese adjectival nouns and English adjectives are external arguments. Compounding of the subject and a Japanese adjective or adjectival noun, and an English participial adjective, is allowed only when the subject expresses an attribute of the entity predicated by the compound, which can be analyzed with the qualia structure, i.e., semantic representations including encyclopedic information. The same semantic feature was also found to regulate the arguments in the transitive construction formed with Japanese deadjectival verbs, thereby showing the significance of this feature.

研究分野：語彙意味論

キーワード：形容詞　複合語　派生語　項構造　クオリア構造

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

動詞のもつ語彙情報（項構造、語彙概念構造(LCS)、事象構造など）についての研究は、1980年代以降大きな成果をあげてきており([1][2][3]など)、これらの研究は、文レヴェルだけでなく、動詞にまつわる語形成についての語レヴェルの研究においても、特に名詞化や動詞由来複合語などを中心に、多くの知見を提供してきた（[3][4][5]など)。

これに比して形容詞については、項構造の解明が立ち遅れており、形容詞の主語が内項であるのか外項であるのかについての合意も得られておらず、語彙意味論的には「段階性、尺度」、「評価性」、「主観性・客観性」といった意味素性による特徴づけや、「個体レヴェル・場面レヴェル」といった属性描写に関する特徴づけといった研究（[6][7]など）があるものの、このような形容詞の意味特性が語形成規則とどのように関係するのかについて体系的な研究はほとんど存在していない状況であった。語根形容詞を主要部とする複合の研究は動詞由来複合語に比して極めて少なく、また、動詞を基体とする語形成であっても、派生形容詞や複合形容詞の形成と語彙情報との関係は必ずしも十全に議論されては来なかった。

また、名詞の意味構造については、クオリア構造の導入([8])などにより、多くの知見が蓄積されているが、これが語形成、特に名詞＋述語の形をもつ複合語の形成メカニズムにおいてどのような役割を果たすかについては、いまだ十分な検討がなされていなかった。

２．研究の目的

そこで、本研究は、形容詞類（日本語の形容名詞を含む）に関わる形成に焦点を当て、(1)形容詞類の項構造や意味構造が、語形成規則にどのように関与するか、(2)名詞＋形容詞類の形の複合語形成において、名詞の意味構造や、名詞と形容詞類の意味関係がどのように関与するか、(3)動詞の項構造や意味構造が、動詞由来の形容詞類を形成する語形成にどのように関与するか、という３つの観点から、語彙情報と形容詞をめぐる語形成との関係を解明することを目的とした。これまで、動詞と比較して等閑視されてきた形容詞類に焦点をあてることで、語形成研究に新たな知見をもたらすと同時に、語形成という観点からみることによって形容詞類の語彙情報についての理解を一段と深めることを目指した。

具体的に取り上げた言語現象は以下のようなものである。(1)語根形容詞を主要部とする総合的複合形容詞や、形容詞由来複合名詞は、動詞由来複合語に対してなされてきた説明と同様の説明が可能か、(2)日本語で生産的な主語＋形容詞・形容名詞の形の複合語の形成メカニズムはどのようなものか、(3)英語の動詞由来複合形容詞において、例外的に基体動詞の内項（すなわち派生形容詞の主語）を取り込む複合形容詞は、どのような意味的条件で可能になるか、(4)動詞から形容詞を派生する日英語の接尾辞について、項構造および意味構造の観点からどのような相違があるか、(5) 形容詞から派生する動詞が例外的に他動詞構文において状態変化の意味をもつ例には、どのような項構造および意味的要因が関わっているか。

３．研究の方法

本研究の初期段階においては、特に語根形容詞を主要部とする総合的複合形容詞および形容詞由来複合名詞を中心に、BNC, COCA などのコーパスからデータを収集し、検討を行った。この作業によって得られた例を踏まえ、検索対象が定めにくいタイプの複合語や派生語の研究に際しては、先行研究や文献、インターネット上の各種資料からの用例の収集に加えて、仮説に基づく作例とその容認性判断を使って分析を行った。

４．研究成果

(1)語根形容詞を主要部とする総合的複合形容詞や、形容詞由来複合名詞は、動詞由来複合語に対してなされてきた説明と同様の説明が可能か

非主要部が主要部の項として解釈される複合語（「総合的複合語」）については、「第 1 投射の原理」([9])によって、主要部の内項が必ず非主要部によって満たされねばならないとする制約に支配されていることが定説となっているが、主要部が形容詞の場合にもこの原理が有効かどうかという問題は、これまで看過されてきた。そこで、本研究では、まず英語の語根形容詞を主要部とする複合形容詞（e.g. light-sensitive）について、COCA を用いた調査を行い、その結果、形容詞によって生産性に違いはあるものの、複合語を形成するのは、補部に限られており、第 1 投射の原理が有効であることを確認した。いっぽうで、主要部が形容詞からの派生名詞である場合（e.g. light-sensitiveness）については、叙述対象である主語との複合もある程度の生産性があることが明らかになった。これは、「名詞＋名詞」型の複合語の場合、主要部が項構造を有する場合でも、総合的複合語ではなく語根複合語を形成する可能性があることが原因だと考えられる。ただし、主語と結合している形容詞派生複合名詞がもとの形容詞の補部と共起している例も数件見つかり（e.g. world-consciousness of the indigenous Aboriginal population (2009 AmerIndianQ)）、これはもし of 句が「項」と見なされるならば、明らかに第 1 投射の原理の違反となる。

次に、日本語の形容詞を主要部とする複合について、辞書を中心とした調査を行い、そもそも

補部をとる形容詞が少ないため、英語との比較は難しいが、補部との複合はほとんど皆無であることを確認した。それに対して、叙述対象、すなわち主語との複合（e.g. 幅広い）は生産性が認められた。さらに、形容詞からの派生名詞を主要部とする複合名詞についても、主語との複合が可能である（e.g. 品薄）ことから、これらの複合が第 1 投射の原理に従うという仮定のもとで、日本語の形容詞の主語は内項であるという仮説を導き出した。また、形容詞に類するカテゴリーである形容名詞、すなわち、形容動詞の語幹となる名詞については、補部との複合（e.g. 近所迷惑）に生産性が認められることから、主語は外項だと考えられる。この仮説は、日英の形容詞研究において重要な論点に関わるものであり、その妥当性は、今後統語論の観点から検証していかねばならない。（由本 2021）

(2)日本語で生産的な主語＋形容詞・形容名詞の形の複合語の形成メカニズムはどのようなものか

日本語の形容詞のみならず形容名詞も主語との複合が許され、形成される複合語の叙述対象は複合した名詞の所有者にあたるものになる（e.g. この道は幅広い＝この道の幅は広い）という事実は、これらが、非主要部である名詞の意味情報を利用した語形成であることを示唆している。以上のことから、日英語の複合形容詞・複合形容名詞には、項構造を基盤とした語彙部門での複合（基本的に第一投射の原則に従う）だけではなく、複合する名詞のクオリア構造から新たな項を掬いだすことにより述語機能が保証される語形成によるものが存在することを明らかにした。複合した名詞の意味を利用して、そこから複合語の項を導き出すメカニズムは、日本語では、(5)で考察した形容詞派生動詞のほか、「名詞＋動詞連用形」型の複合動名詞 （e.g. ～を値上げ（する）＝～の値を上げる、～が色落ち（する）＝～の色が落ちる)においても観察されるものであり、(3)に述べるように、他言語においても、広く用いられているメカニズムだと考えられる。（由本 2020）

(3) 英語の動詞由来複合形容詞において、例外的に基体動詞の内項（すなわち派生形容詞の主語）を取り込む複合形容詞は、どのような意味的条件で可能になるか

上記(1)の項でも述べたとおり、英語の形容詞が総合的複合語を形成する場合、非主要部は形容詞の補部に限られ（e.g. light-sensitive)、主語が入る例は見当たらない。同様に、動詞から派生した分詞形容詞を主要部とする総合的複合語においても、分子形容詞の主語ではなく、形容詞の補部または付加詞が非主要部として取り込まれる（e.g. accident-ascribed failure, hand-woven fabric）が、これは「第一投射の原則」([9])が予測するとおりである。ところが、例外的に基体動詞の内項、すなわち派生形容詞の主語にあたる項が非主要部として取り込まれる例がある（e.g. tax-included price, temperature-conditioned air)。このような例を観察すると、非主要部である名詞（tax, temperature）と叙述対象の名詞（price, air）との間に分離不可能な部分・属性とその所有者という意味関係があることがわかる。そのような意味関係がない場合、当該の形の複合形容詞は容認されない（*beer-drunk man)。ここには、上記(2)に述べた日本語の複合形容（名）詞の場合と同じく、非主要部名詞の意味情報を利用して、複合形容詞全体が新たな主語をとることによって述語機能を保証する語形成の仕組みが働いていると考えられる。また、このタイプの総合的複合語形成は、項構造を利用した規則に基づくもの(e.g. beer drinker, hand-woven)とは異なり、生産性が低く、アナロジーに基づく語形成の特徴を示すことも論じた。（伊藤 2020）

(4) 動詞から形容詞を派生する日英語の接尾辞について、項構造および意味構造の観点からどのような相違があるか

心理動詞から接辞付加によって派生する日英語の形容詞（e.g. 好む~好ましい、like~likeable など）について，派生形容詞と基体動詞の関係や意味的特徴について考察した結果、形容詞を派生する日本語の接尾辞-*asi* と英語の接尾辞-*able* が外項の抑制と直接内項の主語への取り立てという項構造における機能の共通点を有することが明らかになった。具体的には、日本語の心理動詞には対象項を対格「を」で表示するもの（e.g. うらやむ、嘆く、など）と与格「に」で表示するもの（e.g. 驚く、困る、など）があるが、対格の表示と主語の外項性を関係について規定した Burzio の一般化から主語が外項であるのは前者であるといえるため、接尾辞-*asi* が付加して形容詞を作れるのは前者の主語が外項である動詞の場合に限られる（うらやましい、嘆かわしい vs. *驚かしい、*困らしい)。同様の理由から英語の-*able* は受動態が不可能である動詞につかないことが観察されてきた（e.g. *resemblable)。

その一方で、日英語のこれらの接辞が示す主観性という意味的特徴には異なる要因が存在することが明らかになった。英語の心理動詞に-*able* が付加して派生した形容詞は、-*able* の本来の用法における「可能性」の意味（e.g. moveable「動かせる」）ではなく、例えば regrettable は「後悔できる」ではなく「後悔すべきである」という主観的な遺憾の情を表すが、その意味特徴は基体動詞の意味や目的語の語用論的性質といった文脈に依存すると考えられ、同様のことがポルトガル語やイタリア語で類似した意味をもつ接辞についても提案されている。それに対して，日本語の-*asi* の場合は、接辞本来がもつ主観性という意味特徴が動詞の意味と合わさって属性を表すと考えられ、さらに-*asi* が感情をあらわす心理動詞につく場合は外項の抑制に加えて経験者項を付与する可能性が接辞-*gar* との共起関係（e.g. うらやましい ~ うらやましがる）から示唆された。このように形容詞を派生する接辞に対して項構造の操作に加えて[+主観性]のような意味

的素性を設定する必要性が明らかになったことは、派生接辞の語形成理論における位置付けと語彙的情報のあり方についての理論的な方向性とさらなる課題を示すものである。（杉岡 2020）

(5) 形容詞から派生する動詞が例外的に他動詞構文において状態変化の意味をもつ例には、どのような項構造および意味的要因が関わっているか

日本語の形容詞から複数の接辞(-める・まる、-げる・がる、-る)によって派生する状態変化動詞の自動詞項文と他動詞構文（e.g. 風の勢いが強まる / 風が勢いを強める）がほぼ同じ意味を表すことの要因について、類似した構文を作る単純動詞（e.g. 川の水位が上がる / 川が水位を上げる）との比較対象を含めてその項構造と意味特徴を調査し考察した。その結果、一部の形容詞が有する段階性という意味特性に起因する派生動詞のアスペクトの漸進性に加えて、主体とその属性（e.g. 風の勢い、川の水位）の非分離性という述語の項のあいだに存在する意味的関係が、内在的変化にもとづく再帰的な項構造および統語構造への投射を引き起こす可能性が明らかになった。この主体と属性という関係性は、上の(2)と(3)に述べられた複合形容詞の分析においても複合語を成立させる要因として指摘されており、そこで提案されている名詞のクオリア構造を用いた分析がこれらの動詞の示す再帰的な項構造にも適用できると考えられる。さらに、形容詞派生動詞を含む状態変化動詞が作る他動詞構文についてここで得られた研究成果は、最近のヨーロッパ言語における反使役化の意味構造をもつ他動詞文についての研究を視野に入れることでさらに普遍言語的な理論的貢献につながることが期待される。 (Sugioka 2022, 杉岡 2023)

このように、日英語の様々な語形成プロセスについて、項構造と意味特徴に焦点を当てて分析を行い、それぞれの分析を比較検討することによって、本研究全体で以下のような新たな知見が得られた。

① 動詞由来複合語に関わる項構造の制約は形容詞と項の複合にも有効である。
② (1)から、日本語の形容詞の主語は内項、形容名詞と英語の形容詞の主語は外項であると考えられる。
③ 複合語や派生語の形成において、述語の項となる名詞に対する認可条件として、分離不可能な部分・属性という意味関係が重要な役割を果たす場合がある。

なお、本研究の成果を発信すると同時に形容詞をめぐる語形成についての議論を深めるために、2021 年 3 月 7 日（10:30-17:15）に、「形容詞が関わる語形成をめぐって」と題するワークショップをオンラインで開催した。上記(2), (3), (4)についての発表の他、本研究グループ外から長野明子氏（静岡県立大学）および西山國雄氏（茨城大学）を講師として招き、活発な議論を行った。

＜引用文献＞

[1] Rappaport, H.M.and B. Levin (1988) Building verb meanings. In M. Butt and W. Geuder (eds), *The projection of arguments*, 97-134. CSLI.
[2] Jackendoff, R (1990) *Semantic structures*. MIT Press.
[3] Grimshaw, J. (1990) *Argument structure*. MIT Press.
[4] 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
[5] 由本陽子(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房
[6] Kennedy, C. and L. McNally (1999) From event structure to scale structure: Degree modification in deverbal adjectives. *Proceedings of Semantic and Linguistic Theory 9*, 163-180, CLS Publications.
[7] Carlson, G. (1977) Reference to kinds in English. Ph.D. thesis University of Massachusetts.
[8] Pustejovsky, J. (1995) *The generative lexicon*. MIT Press.
[9] Selkirk, E. (1982) *The syntax of words.* MIT Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　12件）

１．著者名 由本陽子	４．巻 2019
２．論文標題 英語の軽動詞構文－主動詞がgive とmakeの場合についての試論－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語文化共同研究 プロジェクト2019自然言語への理論的アプローチ	６．最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/76971	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤たかね	４．巻 27
２．論文標題 英語の動詞由来複合語再訪--動詞の直接内項を取り込む分詞形容詞型についての予備的考察--」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語・情報・テクスト	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00080111	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 由本陽子	４．巻 XIII
２．論文標題 総合的複合語形成に関わる制約の再検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『英文学研究』支部統合号	６．最初と最後の頁 175-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 由本陽子	４．巻 2020
２．論文標題 語形成における語彙意味特性の役割	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2020自然言語への理 論的アプローチ	６．最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/84975	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 由本陽子	4．巻 1
2．論文標題 複合語形成から明らかになる部分名詞と形質名詞の性質について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本英文学会第90回大会Proceedings	6．最初と最後の頁 263-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 由本陽子	4．巻 2018
2．論文標題 形容詞を基体とする複合語についての一考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2018自然言語への理 論的アプローチ	6．最初と最後の頁 89-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/72712	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 由本陽子	4．巻 4号
2．論文標題 「動詞＋動詞」型複合語の意味合成メカニズム再考	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日語偏誤与日語教学研究	6．最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉岡洋子	4．巻 4号
2．論文標題 文と複合語における項の義務性について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日語偏誤与日語教学研究	6．最初と最後の頁 42-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉岡洋子	4．巻 51
2．論文標題 動詞由来形容詞の派生をめぐる考察：接辞 -asiと -ableを中心に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 47-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤たかね	4．巻 21
2．論文標題 「語」のレベルの脳内処理から見えること---言語学と脳科学の協働に向けて---	5．発行年 2019年
3．雑誌名 認知神経科学	6．最初と最後の頁 209-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11253/ninchishinkeikagaku.21.209	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 由本陽子	4．巻 1
2．論文標題 部分名詞を非主要部とする複合語から見た動詞由来複合名詞の叙述性再考	5．発行年 2017年
3．雑誌名 言語文化共同プロジェクト2016　自然言語への理論的アプローチ	6．最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/62076	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 由本陽子	4．巻 1
2．論文標題 日本語の複合動詞研究の回顧と再考	5．発行年 2018年
3．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2017　自然言語への理論的アプローチ	6．最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/69882	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 由本陽子	４．巻 90
２．論文標題 語彙・構文の文法現象における名詞の役割（工藤和也・小薬哲哉とのシンポジウムの要旨）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本英文学会第９０回大会Proceedings	６．最初と最後の頁 263
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 由本陽子	４．巻 90
２．論文標題 複合語形成から明らかになる部分名詞と形質名詞の性質について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本英文学会第９０回大会Proceedings	６．最初と最後の頁 263-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤たかね	４．巻 22(11)
２．論文標題 文字の活用・書きことばの活用	５．発行年 2017年
３．雑誌名 学術の動向	６．最初と最後の頁 83-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5363/tits.22.11_83	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 由本陽子	４．巻 1
２．論文標題 形容詞を基体とする複合語についての一考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語文化研究プロジェクト2018 自然言語への理論的アプローチ	６．最初と最後の頁 89-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/72712	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 杉岡洋子	4．巻 49
2．論文標題 複合名詞の事象解釈をめぐる考察	5．発行年 2018年
3．雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sugioka, Yoko	4．巻 38(2)
2．論文標題 Book Review: Taro Kageyama. Ten to sen no gengogaku: Gengo-ruikei-gaku kara mieta Nihongo no honshitsu [Individuals and Links in Language Typology]. Kurosio Publishers.2021	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6．最初と最後の頁 283-289.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/jjl-2022-2062	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sugioka, Yoko	4．巻 第54号
2．論文標題 Pseudo-reflexive constructions with deadjectival and inherently-directed motion verbs in Japanese	5．発行年 2023年
3．雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 79-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 由本陽子	4．巻 2021
2．論文標題 カテゴリー別に考える第1投射の条件	5．発行年 2022年
3．雑誌名 言語文化共同研究プロジェ クト 2021 自然言語への理論的アプローチ	6．最初と最後の頁 52-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/88334	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hirose, Yuki, Yuki Kobayashi, Tzu-Yin Chen, Aine Ito, and Takane Ito.	4．巻 28
2．論文標題 ERP responses to different types of pitch accent violation in Tokyo Japanese: Rule application or lexical memory?	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6．最初と最後の頁 333-344
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　6件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Yoko Yumoto
2．発表標題 "Semantic interpretation of Japanese verbal compounds revisited.”
3．学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistics Conference.（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 近藤森音・伊藤たかね
2．発表標題 複合形容詞への協調促音挿入における音韻効果と形態効果--二肢強制選択課題による検討
3．学会等名 日本言語学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 由本陽子
2．発表標題 日英語の形容詞由来複合語形成に関わる制約について
3．学会等名 ワークショップ『形容詞が関わる語形成をめぐっ て』
4．発表年 2021年

１．発表者名 杉岡洋子
２．発表標題 動詞由来の主観的形容詞の派生について
３．学会等名 ワークショップ『形容詞が関わる語形成をめぐっ て』
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤たかね
２．発表標題 X-V-en 型の動詞由来複合語再訪：直接内項を取り込む例をめぐって
３．学会等名 ワークショップ『形容詞が関わる語形成をめぐっ て』
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yoko Sugioka
２．発表標題 "Syntax-semantics discrepancy in deadjectival and inherently-directed motion verbs in Japanese."
３．学会等名 Workshop on change of state verbs -- Empirical and theoretical perspectives, 44th Annual Conference of the German Society of Linguistics（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 杉岡洋子
２．発表標題 語形成の多様性から言語と心の仕組みを考える
３．学会等名 慶應義塾大学言語文化研究所総会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 由本陽子
２．発表標題 複合語形成における事象から属性へのシフトー「X＋動詞連用形」型複合名詞を中心に
３．学会等名 日本言語学会第157回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sugioka, Yoko, Ito, Takane, and Yumoto, Yoko
２．発表標題 Measuring events by word formation in Japanese: Quantification with hito- vs. degree modification with ko-.
３．学会等名 The 26th meeting of the Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 杉岡洋子
２．発表標題 文と複合語における項のあらわれ方
３．学会等名 日本語の誤用及び第二習得研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sugioka, Yoko
２．発表標題 Event/entity polysemy in deverbal compounds
３．学会等名 International Symposium of Morphology 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小林由紀、杉岡洋子、伊藤たかね
２．発表標題 日本語新規動詞の活用―音便の有無および語幹末子音による比較
３．学会等名 日本言語学会第159回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤たかね
２．発表標題 言語の音を操る頭の中の「規則性」
３．学会等名 連続講座「声の力を学ぶ」第11回講演（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 由本陽子
２．発表標題 複合語形成から明らかになる部分名詞と形質名詞の性質
３．学会等名 日本英文学会関西支部第12回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kondo, Morine, Yohei Oseki and Takane Ito
２．発表標題 Morphological structure of Japanese adjectival compounds
３．学会等名 The 30th Japanese/Korean Linguistics Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計11件

1．著者名 由本陽子	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 304
3．書名 『名詞をめぐる諸問題--語形成・意味・構文--』（由本陽子・岸本秀樹（共編））「日本語の「名詞＋動詞連用形／形容詞」型複合語形成における「形質名詞」の役割」(47-67)	

1．著者名 杉岡洋子	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 304
3．書名 『名詞をめぐる諸問題--語形成・意味・構文--』（由本陽子・岸本秀樹（共編））「「動詞連用形＋名詞」複合語の多義について」（2-23）	

1．著者名 伊藤たかね	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 304
3．書名 『名詞をめぐる諸問題--語形成・意味・構文--』（由本陽子・岸本秀樹（共編））「名詞転換動詞形成にかかわる制約--英語の作成動詞と産出動詞を中心に--」（27-46）	

1．著者名 由本陽子	4．発行年 2021年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 523
3．書名 『言語研究の楽しさと楽し み』　（岡部玲子・八島純・窪田悠介・磯野達也（共編）「英語の軽動詞構文における項の具現化ーgiveを主動詞とする場合を中心にー」（199-209)	

1．著者名 杉岡洋子	4．発行年 2021年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 523
3．書名 『言語研究の楽しさと楽し み』 （岡部玲子・八島純・窪田悠介・磯野達也（共編））「主観的形容詞の副詞用法 ―「面白く読む」と「面白く書く」」（123-134）	

1．著者名 Yoko Yumoto	4．発行年 2021年
2．出版社 CSLI Publications	5．総ページ数 402
3．書名 “Semantic Interpretation of Japanese Verbal Compounds Revisited.” Japanese/Korean Linguistics vol. 28.(17-32)	

1．著者名 西原哲雄・島田雅晴・時崎久夫・由本陽子・西山國雄（共著）	4．発行年 2021年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 198
3．書名 『形態論と言語学諸分野とのインターフェイス』（105-142）	

1．著者名 由本陽子	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 373
3．書名 『統語構造と語彙の多角的研究』「日本語の複合における事象から属性へのシフトー「X+動詞連用形」型複合名詞を中心に」(335-350)	

1．著者名 杉岡洋子	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 232
3．書名 『よくわかる言語学:』「 形態論・語形成」（46-63）	

1．著者名 由本陽子	4．発行年 2023年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 -
3．書名 『類型論から見た「語」の本質』「日英語の形容詞に関わる語形成のメカニズムと意味解釈について	

1．著者名 伊藤たかね	4．発行年 2023年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 -
3．書名 『ことばを科学する：理論と実験で考える、新しい言語学入門（仮）』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	杉岡　洋子 (Sugioka Yoko) (00187650)	慶應義塾大学・経済学部（日吉）・名誉教授 (32612)	
研究分担者	伊藤　たかね (Ito Takane) (10168354)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・特任教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関